地域コミュニケーションDX調査業務

概　要

次世代へ持続可能な地域コミュニティを引き継ぐために

地域コミュニティを取り巻く課題と対応の方向性

地域コミュニティにおける課題と対応

課題

負担が大きい

次世代・若い世代が参加しない

現状

今の世代の負担が続く
（紙・対面中心）

イメージが良くない・認識する機会がない

対応方向性

デジタルを活用した
連絡・情報共有の展開

デジタル活用における課題と対応

課題

デジタル使えない

デジタルに対するマイナスイメージ

現状

デジタル化が必要だが、
高齢者等はサポートが不可欠
（スマホ教室だけでは限界）

高齢者を中心にデジタルへの
拒否感・マイナスイメージがある

対応方向性

地域で寄り添い支援するデジタル
サポーターの育成等の取組 /
スマートシティサポーターによる
マイナスイメージを払拭する活動・発信

現在のコミュニケーションツール「あいべあ」が抱える課題

現在、市が提供する「あいべあ」は、町内会等での継続的な活用に至っていない現状がある。
その背景には、以下の課題が存在する。

【機能的な課題】

- ブラウザベースなので、ネイティブアプリのようなプッシュ通知ではない
- ブラウザ閲覧時に都度ログインが必要
- UI/UXの大幅な見直しが必要

【運用的な課題】

- 高齢者にとって登録自体のハードルが高い
- 地域での周知やサポート体制の構築が不足
- 「防災メール」のような一方的な情報伝達ツールと誤認されている（双方向機能の認知不足）

「あいべあ」を含めて、地域で継続的に利用されるような使いやすいツールや仕組みが求められる

本事業は単なるITツールの導入ではなく、地域のつながりを次世代へ引き継ぐための「持続可能な仕組みづくりの一つ」である。

現在（限界）

令和7年2月の豪雪時、迅速な安否確認や細やかな情報共有の限界が露呈。
これらの課題がより顕在化している。

- アナログな連絡手段
- 特定世代への過度の負担
- 紙と対面中心の非効率な運営

未来（持続可能）

- デジタルツールの活用
- 多世代が参画できる環境
- 効率的で持続可能なコミュニティ

解決へ向けた「3つの歯車」（地域コミュニケーションDXの全体像）

地域未来交付金を活用した3か年の事業

この3つが連動することで
地域のデジタル活用が動き出す。

地域コミュニケーションDX調査業務（全体プロセス）

1 現状分析

①あいべあ等の総括、課題・機能活用可能性の分析

2 比較・ヒアリング

② 地域DXツールの比較評価、リビングラボへの反映 /
③地域団体向けDX機能ヒアリング

3 技術的評価

④DXサービスのUI/UX、オープンソース化のメリットや可能性、リスク等の分析

4 最適化・要件定義

⑤地域DXサービスの要件定義、システム構成の選定 /
⑥持続可能なコミュニティ形成の課題・取組分析

単なるツール導入ではなく、リビングラボやオープンソース活用を含む「高度な技術的知見」に基づく調査と要件定義を行う。

リビングラボ的取組の重要性と位置づけ

デジタルツールの比較検討

要件定義への確実な反映

LINEやあいべあ等のコミュニケーションツールについて、既に使われている団体等への聞き取りや、利用意向のある団体等に実際に使っていただいた結果をヒアリングすることで、地域住民の意向やニーズを把握し、要件定義に反映させていく。